

白山市「古宮遺跡」発掘調査現地説明会資料

(公財)石川県埋蔵文化財センター

- ◎ 調査地 白山市白山町地内
- ◎ 調査原因 地方道改築一般県道手取川自転車道線（手取キャニオンロード）事業
- ◎ 調査主体 石川県教育委員会（調査担当：公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）
- ◎ 調査期間 平成30(2018)年6月下旬～11月上旬（予定）
- ◎ 調査面積 1,250㎡（平面積550㎡）（予定）
- ◎ 調査概要

手取川右岸の古宮遺跡は、旧加賀一の宮駅付近に広がる平安時代から中世にかけての遺跡です。一帯には1480(文明12)年まで白山宮（白山比咩神社の前身）が所在していたとされます。1996年の手取川七ヶ用水白山管理センター地点の発掘調査では、中世のカワラケ（素焼きの土器皿）が大量に出土したことで注目されました。

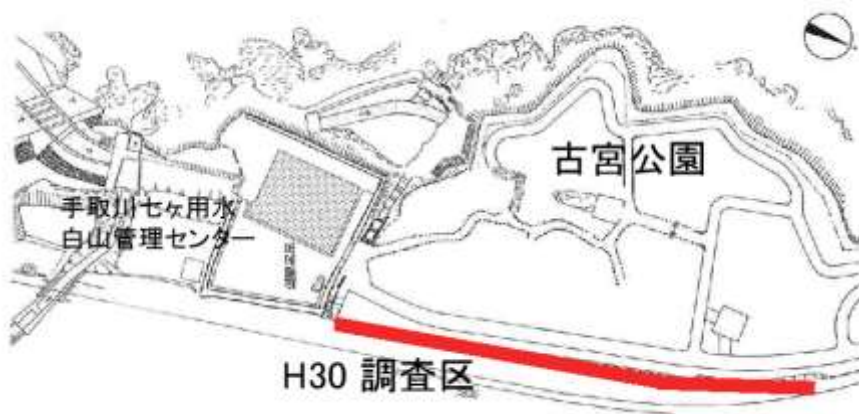
今回の調査では、平安時代後期～室町時代後期までの4層の遺構面を確認しました。現在、第1面（室町～戦国期）および第2面（鎌倉～室町期）の調査が終了し、第3面（平安末期）～第4面（平安後期～末期）の発掘を実施中です。建物の礎石や石列、溝などの遺構を検出し、大量出土のカワラケに加えて、中国製の青磁や白磁の碗・皿、瀬戸焼の製品、加賀焼や珠洲焼、越前焼のすり鉢や甕など、豊富な遺物が出土したことから、調査区は白山宮の境内地である可能性が高まりました。



古宮遺跡の位置



古宮遺跡の発掘調査区



調査区の位置



古宮遺跡の空中写真



調査区の空中写真



白山比咩神社旧社地 (安久濤之森) 乙図
(金劔宮蔵 明治初期)



白山比咩神社旧社地 (安久濤之森) 甲図
(金劔宮蔵 明治初期)



旧社地と調査区の空中写真

☆今回の調査によりわかったこと

調査区の中央から南側にかけて確認した平安時代後期～室町時代後期の4層の遺構は、当時の「白山宮」に関係した施設とみられます。建物の礎石、石列をもつ区画溝、石畳状の敷石遺構、石段状の遺構などを、火災後の整地層や遺構面で確認したことは、文献史料から知られている白山宮の火災や自然災害のたびに繰り返された神殿の再建などを裏付けるものです。

調査では素焼きの皿「カワラケ」を中心に、青磁の花瓶や碗・皿、瀬戸焼の瓶子（へいし）、加賀焼や珠洲焼、越前焼の容器などが2万点以上出土しました。出土遺物の9割以上は、割れた平安時代後期～室町時代後期カワラケで占められ、各整地層から多量に出土していることから、カワラケを用いた祭事が頻繁に行われていたとみられます。詳しくは、今後の遺物整理により、遺構の時代や祭事の内容を明らかにすることで、白山宮の遺跡の変遷を明らかにできるものと考えています。



調査区の垂直写真 [中央付近、第3面]



調査区の垂直写真 [南端、第3面]



建物の礎石と石列 [第2面]



区画溝と石列 [第2面]



石列をもつ区画溝 [第1面]



建物の礎石列 [第2面]



石段状の遺構 [第2面]



配石状の遺構 [第3面]



集中出土の室町時代後期のカワラケ [第2面]



平安時代後期のカワラケ [第4面]

☆文献史料にみられる白山宮の被災内容

『続左丞抄』第一、文永六年(1269)付吉田兼文勘文

- ・治暦四年(1068)、加賀白山社の神殿ならびに御躰等が消失し、再び造立がなされたと引用。

『白山宮荘厳講中記録』(白山比咩神社蔵)

- ・延応元年(1239)、神主町宮保氏盛の宮倉より出火、「白山宮神殿以下廿一宇」を消失させる大火となった。
- ・延文元年(1356)の洪水により、平等寺と市場在家が流れ、「宮尻ノ道」も崩壊。
- ・文明十二年(1480)、今町の公人道德の家より出火、類焼が白山本宮に及び、社殿堂宇がごとごとく炎上。
⇒この火災により、白山本宮は現在の白山比咩神社のある三宮町に仮遷座することとなった。